

【ポスターセッション】

福祉系大学生による障がい者の外見的理解と概念的理解

ー学年進行に伴う変化ー

○ 金城大学 岡村綾子 (003446)

キーワード：福祉系大学生，障がい者，理解

1. 研究目的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対して関心をもつようになり，理解が深まっていくような態度の変化を示すが，障がい者に対する顕在的態度(たてまえ)と非顕在的態度(ほんね)とは一致しなかった。そのため，学生の非顕在的態度に及ぼす変数を探るため，「障がい者とは」と尋ねられた場合に描かれる障がい者のイメージについて検討した結果，障がい者のイメージは概念的な理解より，見てすぐ気づく外見的な理解に基づく場合が多いことがわかった。そこで，大学1年生と4年生を対象に小・中学生に対して障がい者について説明する場合の説明内容を求め，外見的理解と概念的理解の学年進行に伴う使い分けについて検討した結果，1年生は4年生よりも概念的に説明している者が多く，逆に外見だけで説明している者が少なかった。4年生が1年生ほど概念的に説明する者が多くなかった理由として，自分の解釈ではなく，事実(外見)を伝えることが誤解を招きにくいということを，障がい者に関する講義をうけたり，実習やボランティア活動を行ったりしたことの効果と考えられた。

以上を踏まえ今回は，小・中学生に対して障がい者について説明する内容を選択肢で選んだ場合の違いについて概念的な説明と外見的な説明の学年進行に伴う変化について検討することにした。

2. 研究の視点および方法

1) 調査協力者 A福祉系大学の2017年度1年生116人，2年生127人，3年生146人，4年生154人，計543人を調査協力者とした。

2) 調査内容 障がい者に対する読書の有無，障がい者に関するテレビ等の視聴の有無，一般的な問いかけによる障がい者に対する態度，障がい者と考える状態，初めて障がい者と関わった時期とその人が障がい者とわかった理由，地域の小・中学生に障がい者について説明する内容などとした。

3) 調査手順と調査用紙の回収 2・3・4年生は，年度初めのオリエンテーションの機会を利用して，1年生は，後期のオリエンテーションの機会を利用して，質問紙を配布し，自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については，1年生は116人に配布し，114人から回収でき(回収率98.3%)，2年生は127人に配布し，118人から回収でき(回収率92.9%)，3年生は146人に配布し，134人から回収でき(回収率91.8%)，4年生は154

人に配布し、138人から回収できた（回収率 89.6%）。有効回答数は、1年 111人（有効回答率 95.7%）、2年 117人（有効回答率 92.1%）、3年 129人（有効回答率 88.4%）、4年 136人（有効回答率 88.3%）であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて実施した。調査対象者には、研究の趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないことについて説明した後に調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

4. 研究結果

小・中学生に対して障がい者についてどのような説明をするかという質問に対して用意された選択肢から選択させた（複数回答可）。各学年の回答された選択肢を「車イスに乗っている人」や「盲導犬を連れている人」などのような外見的な説明の選択肢と、「私たちと同じ普通の人間」というような概念的な説明の選択肢に分類した結果を表 1 に示した。なお括弧内の数字は各学年の選択肢の総選択数で外見的説明と概念的説明の各選択数の合計を除いてパーセントを示した。但し、1年生の外見的説明の選択肢は概念的説明の選択肢の 3 倍あったので、概念的説明の選択総数を 3 倍にして計算した。

表 1 学年別に示した概念的説明と外見的説明の各選択数の合計とそのパーセント

学年	1	2	3	4
外見的説明	152(36.0)	235(48.3)	289(54.1)	285(51.0)
概念的説明	270(64.0)	252(51.7)	245(45.9)	274(49.0)

1年生が外見的説明の選択肢を選んだ割合は 36.0%、概念的説明の選択肢を選んだ割合は 64.0%、2年生では外見的説明が 48.3%、概念的説明が 51.7%、3年生では外見的説明が 54.1%、概念的説明が 45.9%、4年生では外見的説明が 51.0%、概念的説明が 49.0%であった。これらの結果から、1年生は他の学年と異なって概念的説明の選択肢を選んだ割合が高いことがわかった。

χ^2 検定を行った結果、1年生と 2, 3, 4年各学年との間に有意な差がみられたが、2, 3, 4年の各学年間に有意な差は認められなかった。

5. 考察

選択肢から選択させる場合は、記述により説明を求めた場合に比べ思いつかなかったことなどが選択肢に存在するために選択肢自体が説明のヒントになる場合がある。それにもかかわらず、1年生が 2, 3, 4年生より概念的説明の選択肢を選んだ割合が高かったことは、大学入学以前に受けた障がい者に対する説明の影響が考えられる。また、学年進行により概念的説明より概念的説明を選ぶようになることは、障がい者に関する講義を受けたり、ボランティア活動を行ったり、実習に行ったりしたことが影響していると考えられる。